

このことについて、下記のとおり「麦作情報（第3号）」について送付しますので、業務の参考にして
ください。

令和7年産麦作情報（第3号）

1. 気象の概要

- ◆平均気温…1月の4半旬から5半旬は平年よりも高く推移したが、1月の6半旬から2月の2半旬までは低く推移した。
- ◆降水量 …1月の4半旬～2月の2半旬のうち、2月1日に20mmの降雨があったが平年よりも少なく推移している。
- ◆日照時間…1月の5半旬～1月の6半旬は平年よりも多く推移した。2月の1半旬～2半旬までは少なく推移している。

2. 管内麦類の生育状況

▼佐城管内の調査結果（今後調査区の設置を予定）

場所	品種名	播種日	苗立ち数 (本/m ²)	草丈 (cm)	莖数 (本/m ²)	葉数 (L)	備考
鍋島	シロガネ コムギ	11/24	124	14.4	435	4.9	・播種期は平年並み
北川副	さちかおり	11/24	214	14.1	1026	5.9	・播種期は平年並み
川副	はるか二条	12/10	145	9.5	188	2.5	・播種期は平年並み

【概況】

- ・小麦の播種は、11月中～下旬を中心に行われ、現在第5葉～第7葉を迎えており、分けつの抽出も旺盛となっている。
- ・11月下旬～12月初旬に播種された大麦は、現在、3葉期～4葉期を迎えており、分けつの抽出期であるが、播種が遅れた圃場では、生育が緩慢である。
- ・カモによる食害が各地で散見され、特に大きな河川やクリーク付近の圃場で被害が大きい。
- ・11月上旬に播種（早播き）された小麦圃場では幼穂形成期を迎えている圃場も見られる。



写真1. さちかおり情報田の生育状況（北川副）



写真2. さちかおり情報田の生育状況（拡大）

参考 農試作況データ（2月10日調査）

◎農試作況試験における麦類の生育（2月10日調査）

品種	播種期 (月/日)	年次	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉齢 (L)	葉色 (SPAD)	概況 (平年・平均と比較して)
シロガネコムギ	11/20	本年	9.2	807	5.9	54.3	[気象] 1/20~2/10まで ◆平均気温…平年並み(平年差-0.2℃) 1/5 半旬:8.8℃(平年差+3.2℃) 2/2 半旬:1.9℃(平年差-4.3℃) 寒暖の差が激しい ◆日照時間…長い(平年比117%) ◆降水量…少ない(平年比67%) 積雪:2/4~2/5
		平年	21.7	707	5.9	45.4	
		平年差(比)	42	114	±0.0	+8.9	
	12/10	本年	7.5	321	3.4	51.7	
	平年	14.3	451	4.3	48.9		
	平年差(比)	52	71	-0.9	+2.8		
サチホゴールデン	12/2	本年	9.0	491	4.1	44.1	[生育] ◆草丈 全品種・全作期において、過去10年間で最も低いレベル。 ◆茎数 11/20「シロガネコムギ」は多く、その他は少ない。 ◆葉齢 11/20「シロガネコムギ」は平年並み、その他は少ない。 ◆葉色 12/2「サチホゴールデン」、「はるか二条」は平年並み、12/10「はるか二条」は平年よりやや濃い、その他は平年より濃い。
		4ヶ年平均	15.4	857	5.3	44.1	
	平年比(差)	58	57	-1.2	±0.0		
	12/10	本年	8.6	450	3.6	45.4	
	平年	12.8	555	4.1	42.9		
	平年比(差)	67	81	-0.5	+2.5		
はるか二条	12/2	本年	9.0	425	4.0	49.4	
		4ヶ年平均	14.3	825	5.0	49.8	
	平年比(差)	63	52	-1.0	-0.4		
	12/10	本年	8.9	427	3.3	49.1	
	7ヶ年平均	13.1	551	4.1	47.4		
	平年比(差)	68	77	-0.8	+1.7		
留意点	◆ 12/2 半旬~1/3 半旬、2/2 半旬の気温が低く推移したことから、生育はやや停滞している。 ◆ 踏圧は、土壌が乾燥したら実施する。ただし、茎立期(節間長 2cm・草丈約 25cm)以降は幼穂を傷めることがあるので控える。 ◆ 5 葉期以降、雑草防除と無効分げつの抑制、排水対策のために土入れを行う。ただし、今年は茎数が少ないため、過度な土入れは行わず、踏圧後7日以上空ける。 ◆ 雑草の発生が見られる圃場では、早めに茎葉処理剤を施用する。なお、踏圧前後の除草剤散布は薬害を生じることがあるので避けること。						

注意事項

- 1) 「シロガネコムギ」: 苗立数について 11/20 播種は 120 本/㎡、12/10 播種は 150 本/㎡。施肥量は 5.5-4.5-4.0。平年値は収量が過去7カ年の内、収量が最高年と最低年の値を除いた5カ年分の平均。
- 2) 「サチホゴールデン」: 苗立数は 150 本/㎡。施肥量は 6.0-4.0-2.0。平年値について 12/2 播種は試験を開始した R3 年産から4カ年分の平均、12/10 播種は収量が過去7カ年の内、最高年次と最低年次の値を除いた5カ年分の平均。
- 3) 「はるか二条」: 苗立数は 150 本/㎡。施肥量は 6.0-4.0-4.0。平年値について 12/2 播種は試験を開始した R3 年産から4カ年分の平均、12/10 播種は試験を開始した H30 年産以降の7カ年の平均。

3. 今後の管理

1) 穂肥

- 穂肥は、早く施用しすぎると茎葉が繁茂し、後半の肥切れにつながることから、施用は極端に早めないほうが好ましい。
- 11月中旬播種の小麦は、早くても2月中下旬頃から施用する。
- 肥効を高めるため、穂肥後に土入れを行うとより効果的である。

※茎立期（次ページ図1の時期）を迎えた圃場では、麦踏みと同時の施肥は避け、動力散粒機やブロードキャスター等で散布する。

○ビール大麦 「サチホゴールド」

【タンパク質含有率値の目標：10～11%】

2月の降水量と葉色により、穂肥量を決定する。
次表を参考に施肥する。時期は、3月上旬までとする。

(窒素成分 kg/10a)

		2月の降水量 (mm)		
		40	80	120
3月上旬の葉色 (SPAD)	38	1.8	—	—
	40	1.2	—	—
	42	0.6	4.2	—
	44	—	3.6	—
	46	—	3.0	—
	48	—	2.4	—
	50	—	1.8	—
	52	—	1.2	—
	54	—	0.6	4.1
56	—	—	3.5	

茎立期 (節間長が 20mm 以上)
この時期になると、幼穂を傷つける
ため麦踏みは避ける

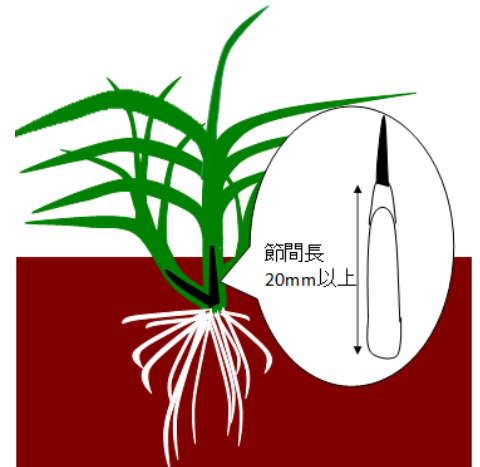


図1.茎立の模式図

(参考) サチホゴールドの穂肥診断基準 (農試)

2) 麦踏み (3葉期以降)

- 麦は畑作物であり、水分も必要であるが、過剰であれば生育阻害の要因となり、麦踏み・土入れ等、肥培管理を徹底するためにも、圃場が乾燥していることが求められる。
- 土壌水分が高い時に麦踏みを行うと土が締まり、湿害を助長し排水性が悪くなる。
- 圃場条件が良いときに3～4回程度実施する。
- 茎立期を迎えた圃場では、茎折れの発生による穂数の減少や株元のなびきにより倒伏に対する抵抗力が弱まるため実施しない。
- 麦踏みの最終時期は節間伸長開始期～茎立期 (図1参照：節間長2cm・草丈25cm程度) 前までである。

【麦踏みの効果】

- ①耐寒性向上 ②根量増加 ③短稈多分げつ型への誘導 ④早立ち防止で凍霜害回避

○穂揃期追肥 (実肥)

タンパクの向上に直結する穂揃期追肥は必ず施用する。特に、パン用小麦は必ず施用する。

葉色の褪め方にかかわらず必ず施用

品 種	窒素量 kg/10a	実肥の施用量 (/10a)
パン用 はる風ふわり	5	硫安 25kg または 尿素 12.5kg
パン用 さちかおり	7	硫安 30kg または 尿素 15kg
めん用 チクゴイズミ	3	硫安 15kg または 尿素 7.5kg

葉色が薄い場合 (出穂期前頃の SPAD 値 40 以下) 施用

品 種	窒素量 kg/10a	実肥の施用量 (/10a)
シロガネコムギ	2	硫安 10kg または 尿素 5kg
大麦	2	硫安 10kg または 尿素 5kg

★穂揃期追肥は、出穂期の3日後が効果的。それ以降に施用する場合は増量が必要となる。

〈液肥利用の留意点〉

- 肥料を溶かす際は、直接タンクに入れると溶けない場合があるため、事前にお湯等で溶かし、タンクに入れると濃度ムラがなくなる。
 ※硫酸による液肥施用は難しいため、液肥利用の際は尿素を用いる。
- 乗用管理機での施用の場合、赤かび病防除との同時施用も可能。ただし施用時期が遅くなるため、3～4割追加した量が必要になる。
- 液肥施用後、芒や葉先などに肥料焼けがみられるが、収量や品質への影響は小さい。

3) 排水対策

- 排水対策は、分けつの確保や登熟向上・収量向上・品質向上に重要である。
- 本年は、現在まで積算降水量は少ないものの、近年は局地的な降雨が増えていることから、今後の降雨に備え、土入れに加え、まくら地の排水溝を整備し、圃場内の水を早く排水できるように努める。
- トラクターカルチで土入れを実施する場合には、排水不良（うね溝の停滞水が多くなる）となりやすいので、うね溝と排水口とをつなぐように徹底する。

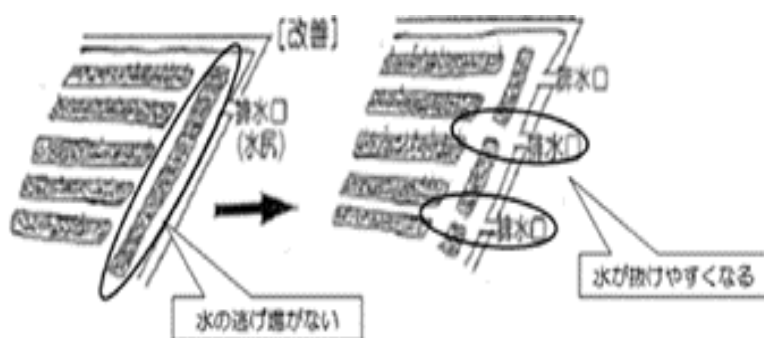


写真3.うね溝と排水口の整備例

4) 病害虫防除

(1) オオムギ網斑病

圃場・株ごとの差が大きくなっているため、各圃場の発生状況を確認が必要である。

防除適期は出穂期～穂揃期で、この時期の防除効果が最も高い。しかし、早い時期から発生株が散見され、病斑が上位葉に進展しているような場合は、直ちに防除を行うとともに、出穂期～穂揃期にも防除を実施する。



写真4.オオムギ網斑病

網斑病の防除適期

麦種	全茎数の 40～50%が出穂した日		出穂期	全茎数の 80%が出穂した日（出穂期から概ね 2～3 日後）					
				0	+5日	+10日	+15日	+20日	+25日
大麦			←→						

注1) 出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2) 矢印は防除適期を示し、薬剤については次表を参照とする。

注3) 出穂期より早い時期から発生株が散見され、病斑が上位葉に進展している場合は、この時期にも防除を実施する。

※ チルト乳剤は1回しか使用できないので注意する。

農薬名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量 (/10a)	使用時期	総使用回数	使用方法
チルト乳剤 25	網斑病	1000倍	60～150L	収穫21日前まで	1回	散布

(2) コムギ黄斑病

- ・降雨などの多湿条件と 10℃以上の気温条件が、一次伝染および二次伝染を助長する。
- ・前作が大豆の圃場では、水稻の圃場より顕著に発生が多くなる傾向にある。また、発病には品種間差異があり、シロガネコムギは耐病性があるが、チクゴイズミ、ミナミノカオリ、はる風ふわり、さちかおりで発病が確認される。
- ・本病が上位葉まで進展すると、収量・品質に影響を及ぼす恐れがあるため、出穂期までに薬剤防除を徹底する。

(登録薬剤：チルト乳剤、ワークアップフロアブルなど)



写真 5.コムギ黄斑病

5) 雑草対策

- ・一部の圃場で 1 年生広葉雑草を中心に雑草（ヤエムグラ、キンポウゲ類、アメリカフウロ、ミチヤナギなど）の発生が目立っている。

現在使用できる生育期除草剤は、草種や使用時期によって効果に差があるため、優先している雑草の種類に応じ、処理時期を逸しないよう早めに対処する。(次ページ表参照)

【注意事項】

麦踏み：麦踏み前後の除草剤散布は、薬害を助長するため避ける。

土入れ：除草剤散布直後に行うと、有効成分の根部吸収が妨げられるので控える。

○生育期除草剤使用例

農薬名	効果のある雑草	使用量 (/10a)	希釈水量 (/10a)	使用時期	総使用回数	留意事項
ハーモニー75 DF 水和剤	1 年生広葉雑草 スズメノテッポウ カスノグサ	5~10g	100L	は種後～節間伸長前 (スズメノテッポウ5葉期まで) (カスノグサ1~3 葉期まで) ※小麦のみ は種後～穂ばらみ期まで 但し収穫 45 日前まで	1 回以内	・カスノグサには 10g/10a とし、土壌処理剤との体系処理で使用 ・周辺作物(特にタマネギ)への飛散には十分留意する ・ヤエムグラ、カスノグサへの効果は劣る
バサグラン 液剤	1 年生雑草 ※イネ科雑草には効果がない	100~200ml	70~100L	生育期(雑草 3~6 葉期) 小麦は収穫 45 日前、 大麦は収穫 90 日前まで	1 回以内	・ミチヤナギ、カスノグサ、ミノス等への効果は劣る
エコパートフロアブル ※1	1 年生広葉雑草 ※イネ科雑草には効果がない	50~100ml	100L	節間伸長開始期まで (広葉 2~4 葉期) (ヤエムグラ 2~6 節期) ただし収穫 45 日前まで	2 回以内	・薬害が出やすい ・ヤエムグラ優先圃場で使用
MCP ソーダ塩 ※2	1 年生・多年生広葉雑草 ※イネ科雑草には効果がない	200~300g	70~100L	幼穂形成期 ただし収穫 45 日前まで	1 回以内	イヌタデ、ミチヤナギ、ヤエムグラ等への効果は劣る

※1 以下の場合、薬害が生じることがあるので留意する。

- ・重複散布は避け、麦が生育不良の場合は使用を避ける。
- ・効果、薬害に問題がないことが確認されていない薬剤との同時施用や7日以内の近接散布は避ける

※2 MCP ソーダ塩とハーモニー75DF との除草効果が相殺され劣るため、混用には注意が必要。また、日中の気温が 20℃以上の時により効果が発揮される。

6) 鳥獣害対策

○カモによる食害

- 川沿い(嘉瀬川、筑後川、クリーク等)の麦においてカモによる食害が毎年確認されており、本年も被害が散見される。
- 被害が小さい場合、補償作用により減収も限定的だが、時期が遅く被害が大きい場合は、減収につながる恐れがある。

(症状)

- 麦の地際部まで草刈り機で払ったように葉が切れている。
- 周辺に鳥の糞が落ちている。



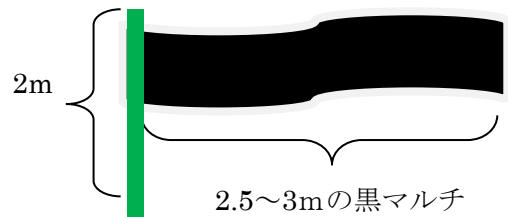
写真 6.カモによる食害圃場



写真 7.カモによる食害の様子 (カモによる食害痕)

(対策)

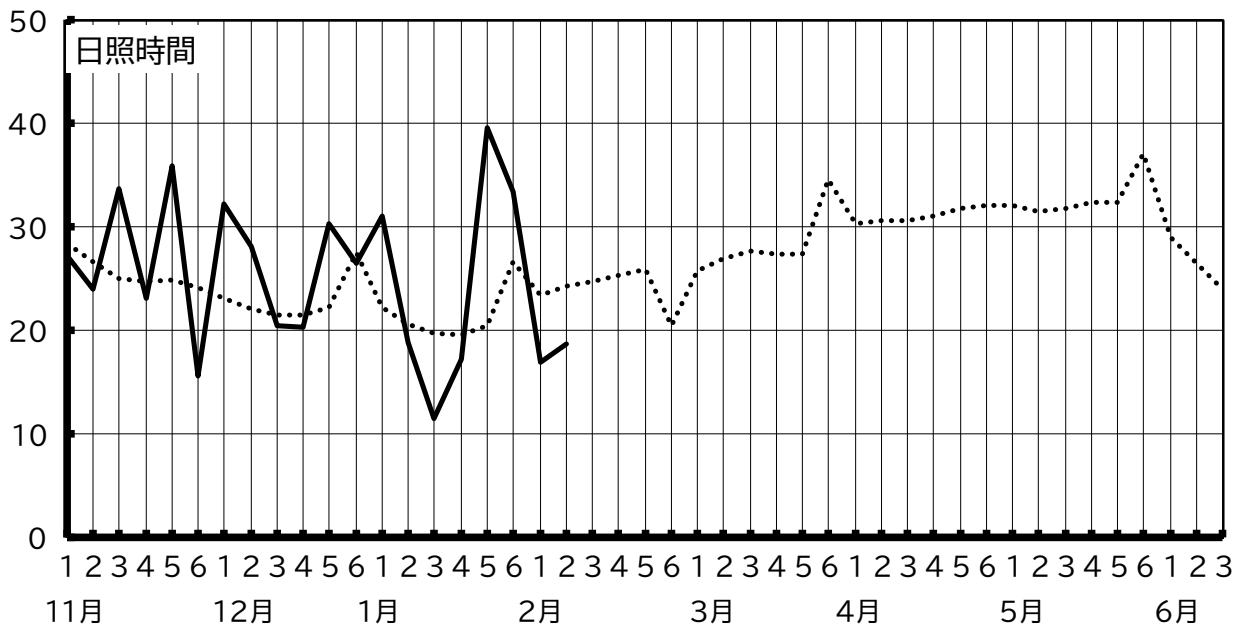
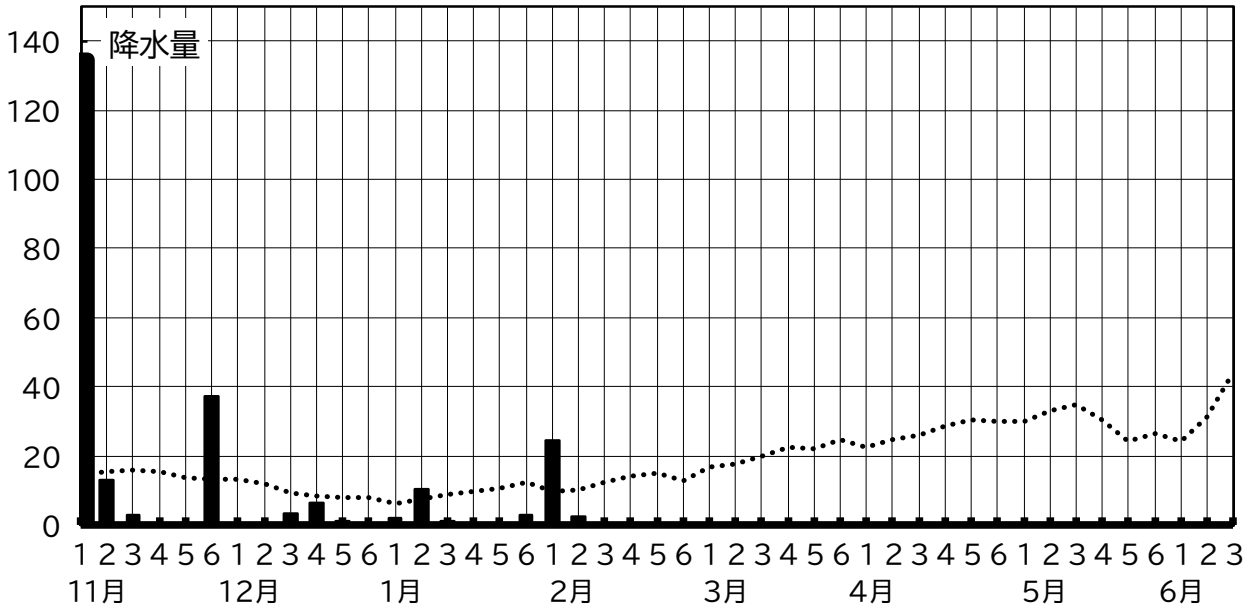
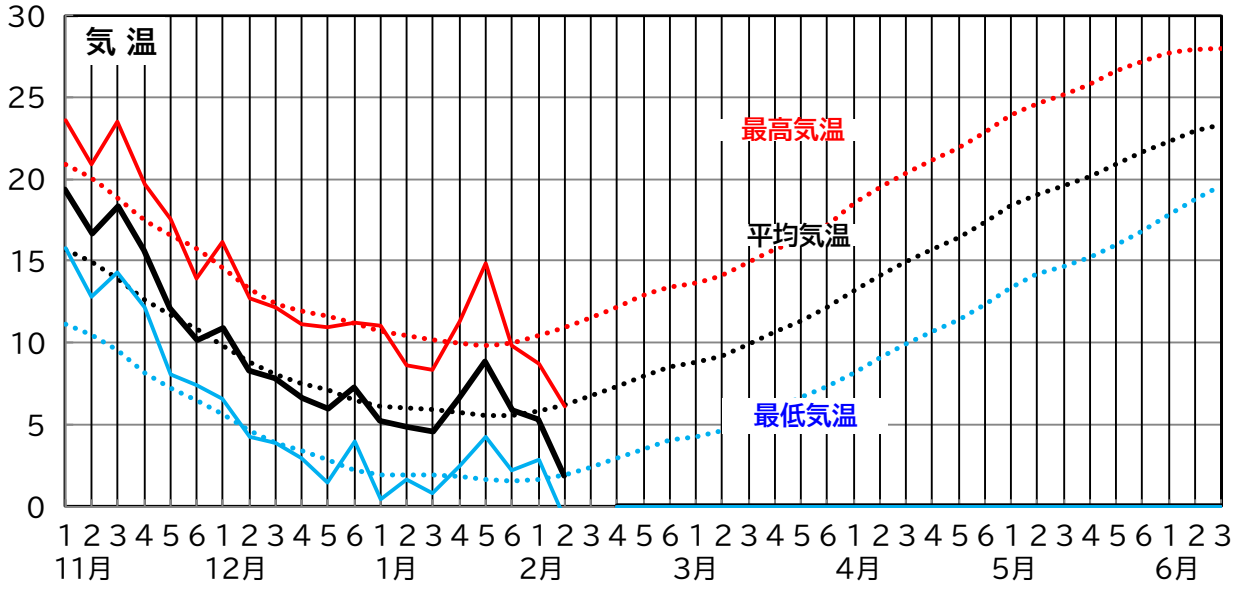
- カモ害の対策として、「のぼり」や「テグス」などの方法がある。「のぼり」は、マルチ支柱の高さが短かかったり、10aあたりの「のぼり」の本数が少なすぎると効果が低減する。
- 水路寄りの部分を中心に設置すると効果的である。
- 2.5~3mの黒色のマルチを2mの支柱につるした「のぼり」を10aあたり5本均等に設置する。
(費用は、「のぼり」1本あたり約420円)



令和7年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値(佐賀)

佐城農業振興センター



※グラフ中の点線は平年値